

先達の方々 屯田兵(その6)

兵村での生活と訓練

軍事訓練

屯田兵は、現役中全ての軍事訓練に励まなければなりません。訓練は入植直後から各個教練、銃剣術、射撃の外週一回程度の中隊訓練、月一回程度の大隊に集合しての大隊訓練、さらに毎年一回野営をし、実践さながらの戦闘訓練などが行われました。また、通常の訓練の外に中隊の中隊本部の当番や弾薬庫、被服庫などの歩哨衛兵勤務などもありました。

しかし、兵農兼務のため、農業を軽視しては兵村が成り立ちませんので、通常の教練は午前中に終え、午後からは開墾作業や農作業に当り、また、播種期や収穫期には訓練を避け、時には集中的に訓練が行われました。

開墾と農作業

兵村の大部分は密林に覆われ、湿地にはアカダモ、ヤチダモ、ドスナラ、柳、ヤチ

坊主など、乾地にはカシワ、イタヤ、シナなどの大木や笹などが密集していました。この伐採と開墾、農作業のために支給された農具は、のこぎり、鉦、鉋、鋤などで、大木はのこぎりで伐採し、人で運べる程度に切断しこれを集めて焼き捨て、熊笹や雑草を刈取り、鋤で起耕し種を植えるという手順で行われました。

作業は、夜明けから鋤や鉋が見えなくなるまで作業に専念し、一日の新墾面積は一〇坪から二〇坪程度で、明けても暮れても伐採、開墾の毎日であったといえます。このご苦労について、屯田兵の方々のお世話を裏面に記しましたが、言葉で言い尽くせないご苦労があったからこそ、今日の端野の礎が築かれたのです。

主要作物は、麦、馬鈴薯、きび、そばなど

作物の種子は、麦類(大麦、小麦)、馬鈴薯、大豆、小豆、麻などが支給されましたが、作付については自由であり初期の作付について第一中隊(端野)の報告によると、麦、馬鈴薯、そばを適作と認め、大豆、小豆は疑問視されていますが、えんどうや金時豆などが作付されるようになりました。また、官給種子にない、いなきびは、お米の代わりに作付されました。

訓練

第一陣の屯田兵が明治三〇(一八九七)

年六月入地し、苦勞して開墾した僅かな耕地に実った初めての収穫期を眼の前にしていた翌三一(一八九八)年、この年の第一陣の屯田兵が、荒海の航海と雨の中ぬかるみを歩き端野兵村に九月二日に到着し、前年入地していた先輩たちに温かく迎え入れられ、それぞれの兵屋で新しい出発を迎えた九月七日、八月下旬から降り続いた雨が常呂川の水位を上げ、濁流となり兵村を呑み込んでしまい甚大な被害を蒙りました。この水害の被害は、裏面に記載した通りであり、常呂川の下流の第二中隊(端野)は他の中隊の三倍もの被害について、特に一区兵村では兵屋が六戸流出し、三頭が溺死するなどの甚大な被害を蒙りました。

この被害について一区部落史に裏面に記載したように記されています。

なお、この水害により一区兵村は現在の常呂川端野大橋の下流にありましたが、翌三二(一八九九)年九月までに現在の高台地に移転しました。また、一区部落史の著者で元端野町長中澤廣氏(屯田兵二世)は、同史の中で、「…多くは内地の土地家屋の凡てを整理し、将来に夢を賭けた者達である。長途の船旅、雨に打たれた泥濘八里の道、ようやく辿り着いた九月二日、入植の一二戸は察するに余りある。しかし、この大訓練こそ屯田兵として北海道に生き抜こうという一大決意の出発点ともなった」と記し

(裏面へ続きます)

ております。

以来、幾度となく襲う水害や寒冷地なら  
ではの冷害に立ち向かい、新しいむら、ふ  
るさとづくりの心血を注がれた屯田兵の偉  
業は、誇りうる端野の財産であり文化でも  
あります。

田中 誠

### 開墾について

#### 屯田兵山田安太郎(一区、愛知県出身)

北海道に移住したら見たこともない森林で、非  
常に大きな木を、私は慣れていないから、あつち  
こつちと山子に聞き、一生懸命習って、人に頼ま  
んで自分で伐った……。貰った土地は全部仕上げ  
た。

#### 屯田兵杉本嘉右衛門(三区、岐阜県出身)

冬になりますと木を伐るのが精一杯。雪が消え  
かゝると伐木した枝を払って、山のように積んで  
火をつけ、唐鋏で下の砥草を削り、またその草を  
火にくべると、まるで豆鉄砲を放つようなパチパ  
チドンドンと音がした……。

#### 屯田兵竹中善吉(三区、岐阜県出身)

開墾道具はといっても、今の道具とは違つて荒地  
を起す道具ですから、頑固一点というよう……  
使うのになかなか重いです。それで家内中で、男  
も女も娘も嫁さんでも、みんな開墾に従事しまし  
て、今のようなプラオなんていうようなものはあ  
りませんでしたから、とても難儀でありましたけ  
れども、一鍬々々が、こんだけづつ土地が増える

と思つて、それを楽しみに一生懸命開墾に従事し  
ました。

### 水害について

大川の水音だけがだんだん高く、夜になると森  
の静寂を破つて不気味に響き、アイヌ犬の遠吠え  
や森の腐食倒木の燐光が怪しく恐怖を増し、安眠  
も出来ぬままに五日間を過ぎた夜の九時過ぎ  
である。子供を抱いて寝ていた父親が、「こらっ！  
またやつたな！」と寝小便と思つたら、なんと、  
自分の床に既に水がつき、飛び起きて火を灯すと、  
土間は水で一ぱい床上に上がろうという有様だ。

ばたばたしている、班長の板木がけたたましく  
打ちならされた。警報の知らせだが、水は深く、  
道は暗い。徒歩連絡の危険を感じて行く事も出来  
ない。見る見る中に水かさが増して来る  
ので各戸とも臨機の処置が先である。大急ぎで屋  
根裏に上る準備が必要だといつたので、梁の上に有  
合せの材木を渡し、戸板を重ねてその上に畳を敷  
き、女子供や老人をあげる騒ぎだ。布団や衣類を  
濡らすまいと作業を進めているのを追い駆ける  
ように水は増し、家によつては屋根の上に移る騒  
ぎで大変だったといふ。

避難作業が一段落すると少しは落ち着きを取  
り戻したが、助けを呼ぶ人の叫び声が聞こえて来  
たが、助けに行く手段がないまゝ夜明けを待った。  
やがて夜が明けたので煙り出しを破つて屋根に  
出て見ると、濁流で森は埋まり、隣家との連絡さ  
え樹木の蔭になつて一切が解らない。ただ樹木が  
繁茂しているお蔭で水勢の無いことがせめても  
の幸いであつた。でも本流近くにいた古兵のうち  
川口、仏石、岩崎、田中、土山、中田の六戸は流  
出した事が後で判明した。幸いこれらの人は一年

前に入地していたので万一に備えてか、魚漁のた  
めか二隻の丸木船をアイヌから分けて貰つてい  
たので、それで避難をし馬の溺死が数頭あつたの  
みで人命に異常の無かつたのが不幸中の幸いだ  
つた。  
しかし古兵は春以来の収穫を皆無にした者も  
あり、物的損失もさりながら、一同が受けた心理  
的衝撃は筆舌に尽くすことの出来ぬ程のものが  
あつたようだ。  
と、その惨状を記している。

### 野村牛村水害取調書

- 一 家屋流出 六戸 潰家 二二戸
- 一 浸水家屋 床上 一六〇戸
- 全 床下 六六戸
- 一 倉庫浸水 床上 二棟
- 全 床下 三棟
- 一 納屋浸水 三棟
- 一 畑作被害 二一三町六反八畝一七歩
- 内訳 一中隊 九一町九畝五歩
- 二中隊 四一町四反三畝五歩
- 三中隊 三一町五反六畝七歩
- クンネツプ 四七町六反歩
- その他 三町歩
- 一 馬匹流出 三頭 (一中隊一区)
- 焚出米及給与人員 計三四八八八分
- 自九月八日至同月二二日 米 八石六斗五升六合

